

助成金申請のポイント

審査員が共感する申請書を書こう！

助成金・補助金は、NPOにとって大切な資金です。助成金・補助金を活用することは、団体の成長発展につながります。団体のミッションに合った助成金を探し、獲得を目指しましょう。

助成機関は、その機関のミッションを解決してくれる団体に助成することで、ミッションの達成を目指します。提供した資金が、ミッションとする社会課題の解決のために効果的に活用されることを望んでいます。審査員は、活動の善し悪しではなく、地域の課題やニーズをとらえ、今後も社会に影響を及ぼす可能性を感じる事業に共感します。申請者の視点ではなく、審査員が何を求めているのか、審査員の視点にたって、共感できる申請書を作成してみましょう。

1. 「採択される助成金申請」の6つのポイント！ 申請書を書く前に準備し、理解しておくこと

(1) 助成機関・行政はパートナー

助成機関は、助成金によって助成機関のミッションを果たしてくれるパートナーを探しています。助成金だけではなく、活動のうえでも連携が生まれています。助成金を探す場合、パートナー選びという意識をもって、自分たちの活動のミッションに合う助成元を選ぶことが大切です。助成金取得だけを目的に申請してしまうと、自分達が目指す活動ができなくなる場合があります。

またパートナーとして信頼してもらい、この団体なら資金を有効に活用してもらえらると思ってもらえるよう、団体や団体メンバーの過去の活動実績や専門性についても明記しましょう。

(2) 助成機関・行政の期待やねらいを把握する

募集要項や申請書、申請書の見本などをしっかり読み込み、助成機関・行政の資金提供側の期待やねらいを把握します。締切間近になって申請する場合、こうした相手の意図を理解しきれず申請してしまうことがあるので、申請をする場合は余裕をもって行いましょう。設問の趣旨を理解し、相手がしっかり説明を求めている項目は、安易に答えず丁寧に答えましょう。

(3) 活動が見える予算書作り

事業計画が見える予算書を作りましょう。事業内容、予算書、スケジュールは連動させ、事業計画に見合った予算を具体的に作ります。活動計画や予算書は、活動の実現性が伝わるようにできるだけ具体的に書きましょう。助成機関によって、対象となる経費とされない経費があるので、募集要項で確認が必要です。

(4) 効果的な添付資料の使い方

添付資料は、事業全体を伝える申請書の補足資料です。添付資料を見なければ事業全体がわからないような申請書類の作り方は望ましくありません。添付資料は、申請内容に合わせて「量と質」を考え、厳選することで、効果的に使うことができます。

(5) 傾向を確認

過去に採択された団体の水準や活動の内容、またどのような点が重視されて採択されたかなど、過去の実績を把握し、申請に生かします。

(6) 助成金申請を念頭に入れた年間計画

年間活動計画の中に、助成金申請を組み込み、余裕をもって準備をしましょう。多くの助成機関は、毎年同時期に募集を行います。完成したものは、団体内で共有し、誤字脱字などの確認をします。誤字脱字は、団体の中にチェック体制が無いとみなされたり、資金の扱いがずさんと捉えられたりすることがあるので、しっかり確認を行いましょう。

2. 「伝わる申請書の書き方」の5つのポイント！

何件もの申請書の中から審査員が短時間で理解し、印象に残る申請書を作成

(1) 指定された申請方法、記載事項、文字制限などの様式を守ります

それぞれの申請書は、審査する側が、知りたいことを効率よく理解するために、工夫されています。申請書や募集要項を確認し、何が求められているかを把握し、決められた中に収めます。

(2) 事業名は事業の顔

事業名は、活動の中身がわかる名前をつけましょう。わかりやすく、簡潔な表現で、活動の全体像が伝わる工夫が必要です。

(3) 事業の内容はバランスよくまとめる

熱い想いの羅列では何をするのが伝わりません。その事業が、課題やニーズに基づき、どのような手順で行い、どのような成果がどの程度得られるのか、共感できるポイントをおさえながら、データや事実などを利用し簡潔にまとめます。「目的」、「解決策や実現性」、「事業による効果」を具体的に、1：1：1を目安にまとめます。

(4) 専門用語は避け、平易な表現を心がける

審査員は、いろいろな分野の人が行うため、その分野のプロとは限りません。誰が読んでもわかるように作りましょう。

(5) 美しい文章表現や感動的な文章は不要

長い文章よりも、箇条書きなど、要点を簡潔に書く工夫が大切です。手書きの場合は、丁寧に読みやすい字を心がけて書きましょう。

3. 助成金の交付を受けたその後の責任

助成金は、申請し取得することが目的ではありません。団体が目指す地域課題の解決の実現のために、助成金をより効果的に活用することが目的です。助成機関は、多くの申請者の中から、限られた資金をより効果的に活用し、地域課題の解決に向け、社会に影響を与えうる活動を実行してくれる団体を選びます。だからこそ「助成金がもらえたら活動しよう」ではなく、助成金を申請する時から、助成金を活用することで、今後の活動や団体運営をどのように充実させるのかを明確にし、有効に活用しなければいけません。助成金は限られた資金だという自覚をもち、助成金をどのように使い、それによってどのような効果が得られたか、報告までしっかり行いましょう。